

MELL EXPO2009

パネルディスカッション「禁止された遊び」

2009年3月21日（金）

@東京大学大学院情報学環 福武ホールラーニングシアター

パネリスト：岡田朋之、木暮祐一、キム・ヨニ

司会：水越伸

水越：「MELLEXP0」2日目のパネルディスカッション「禁止された遊び」を始めます。

「子どものケータイ利用の禁止・制限」といったことが取りざたされていますが、メディアをよくないものにとらえその使用を禁止することと、メディアでワクワクしたり、それをいろいろなことに活用してみたりすること——この二つは果たして対立的にせめぎ合っているものなのか。きょうはケータイを中心に、そうした議論をしていきます。

たとえば「子どもとテレビ」といった議論がありますね。昔には「子どもとラジオ」という議論もあったし、さらには本を黙読するなんてとんでもないという話すらあった。つまり、「新しいメディア」とどうつき合えばいいのか、といった議論はいつの時代にもあるわけです。発達心理学や情報倫理などさまざまな観点がありますが、今日はメディア論な観点から挑発的に話をしたいと思います。

では、メインスピーカーの3人をご紹介します。右から、関西大学総合情報学部教授の岡田朋之さん。早くからモバイルメディアについての一貫した研究をなさっています。「若者の間でどう使われているか」といったメディア文化論から、最近ではモバイルにかかわる諸業界の方々への聞き取りインタビューなど、フィールドワーク的な研究もされています。国際的にも注目を集めるモバイルメディア研究の第一人者です。

つづいて、木暮祐一さん。1300台以上のケータイをお持ちで、非常に鋭い批評家であると同時に、ケータイ業界に対してアドバイス・主張もなさっています。学位を取られた医療コミュニケーションの分野では医療におけるケータイ利用の研究をされており、趣味と実益すべてがモバイル、といえる方です。

そしてキム・ヨニさん。ソウルのご出身で、もともとは文化人類学を専門としながら韓国のインターネット、オンラインの市民メディア・ジャーナリズムの世界で活動されていました。日本では、修士論文を書くまではオーマイニュース・インターナショナル社のCOOを務め、現在はケータイにかんする研究活動をすすめています。キムさんをお呼びしたのは、議論が日本の中だけに閉じてしまっているのではという懸念があるからです。世界で最もケータイが普及している国は日本ではなく韓国や台湾ですし、今回は東アジアにも議論を開いていきたいと思っています。

それではまず、岡田さんにお話をお願いします。

岡田：関西大学の岡田です。きょうは、「メディアの存在自体が社会的に構築されたものである」ということを念頭に置いて考えていきたいと思っています。

新しいメディアの批判・禁止についての話がありましたが、それもいくつかご紹介します。では新しいメディアを、我々はどうわかっていないのか、ということを確認したいんですね。たとえば学校

現場における先生と生徒、あるいは親と子どもの間では、新しいメディアに対してどんな理解のギャップがあるのか。そして、どうそれを埋めていくのか。

最初に「マスコミゲーム」を紹介しましょう。「マスコミゲーム」、ご存じですか。遊ばれた方はいらっしゃいます？

水越：マスコミに遊ばれたことはあります（笑）。

岡田：これなんです。去年、トヨタ博物館に子どもを連れていったとき、『三丁目の夕日』みたいな、昔のあいうものを並べたコーナーにこれがあって仰天したんですが（笑）、要はキャラクターゲームですね。それを「マスコミゲーム」と言っていた。「こいで」（小出信宏社）というところが出していて、わんぱくフリッパー、バットマン、鉄腕アトムやパーマンのマスコミゲームがあるんです。

一般に言うマスコミではなく、マスメディア全般のある種の輝けるイメージなんでしょうね。正確な年代はわかりませんが、マクルーハンの『Understanding media（メディア論）』やマハループの『知識産業論』が出たころです。当時の「マスコミ」、これはいまで言えばネットゲームとかと同じだと思うんです。

さて、次はクイズです。これは大阪大学の辻大介さんが紹介している1921年に出た本の一部です（原房孝『少年の犯罪と其の豫防』）。

「内容はとにかくとして、いかにこれらがわれら大人に対しても強い悩ましげな刺激を与えるかを見よ。まして空想に憧れる架空的な奇抜な事を好み、またようやく春機発動期に達したような少年には、どれほど強い刺激となり、誘引となるかは想像に余りあるのである。要するに〇〇については複雑した色々の問題がある。そしてそれらが直接間接に少年犯罪には大関係をもっている」。

〇〇にはあるメディアが入るんですが、何でしょう。1921年、関東大震災の2年前です。

キム：新聞、雑誌……？

水越：僕も雑誌だと思う。

木暮：マンガはまだないかな。

岡田：なくはないです。わかる人、いらっしゃいます？

（聴衆）：映画ではないですか？

岡田：正解です。正確には活動写真です。たしかに映画にはR指定やPG指定がありますが、映画というメディアそのものが害だと言っているわけです。映画館に行くだけで不良だとか、いまから思えば笑える話ですね。

あと、これはよく知られているんですが、ラジオについて。『週刊朝日』のコラムです（河竹繁俊、大正14年（1924年）8月22日号）。

「（世界中の無線放送が）放送する強弱いろいろな電波が、吾々の前後左右上下から、ほとんど絶えず通り抜けてゐるのかと思へば、あんまりいい気持はしない。神経衰弱めいた頭になるのも、そんな

所為ぢやないかなどと、妙な愚痴さへ出て来る」。

他にも「ラヂオを聴くと小じわがよるのでは（東京日日新聞、大正14年3月2日）」とか、「放送局では来る七月から電力を三倍にするさうですが、義手やはげかくしに害は及ぼすとすれば……（東京日日新聞、大正14年6月2日）」というのもあって、何を根拠にしてるんでしょうね（笑）。（以下、引用は山本透・小田原敏・伍藤正徳「草創期の『ラヂオ気分』」上智大学『コミュニケーション研究』14号、1984年より）

さらにこれは、ドイツのショーペンハウエルから。

「読書は、他人にものを考えてもらうことである。本を読む我々は、他人の考えた過程を反復的にたどるにすぎない。（中略）だが読書にいそしむ限り、実は我々の頭は他人の思想の運動場にすぎない。そのため、時にはぼんやりと時間をつぶすことがあっても、ほとんどまる一日を多読に費やす勤勉な人間は、次第に自分でものを考える力を失って行く。（中略）彼らは多読の結果、愚者となった人間である。なぜなら、暇さえあれば、いつでもただちに本に向かうという生活を続けて行けば、精神は不具廃疾となるからである」（ショウペンハウエル『読書について 他二篇』斎藤忍随訳、p.128）。

一言でいうと、本を読むとアホになるということです。本を読むこと自体が悪いのではないんですが、たくさん読み散らかすのはよくない、と。ショーペンハウエルは19世紀半ばの人で、産業革命の真っ最中だった当時、機械印刷が始まったことで大量出版・大量消費という現象が起きてきました。それまでじっくりと本を読み下すということをやってきた思想家たちにとって、そういう消費的な読書というのはすごく愚かなことだったんですね。

振り返ると、いわゆる情報テクノロジーの革命期には必ずこうした議論が出てきます。このことはやはり踏まえておいたほうがいいでしょう。

次は「大人はわかってくれない」という話です。現代でもやはりギャップは起きていて、たとえば小学校高学年ぐらいになるとブログやプロフ、掲示板をケータイでアクセスして使っていますが、大人はこうした状況を理解していません。親が実態を把握していないケースがあるんです。

具体例をあげましょう。まず、ネットやケータイの利用について学校で指導されているかどうか。「学校から指導され、気をつけている」と答えた生徒は小学校で30%、中学校で40%、高校で50%ぐらいです。逆に「学校では教えてもらったことがない」という生徒は中学生で20%、高校でも30%近くいる。しかし、我々が監修した兵庫県の調査では、中学校で100%、高校でも90%以上が「指導している」と答えているんです。

それから、親子間でのルールづくりについて。親に聞くと、「親子で話し合ってケータイやネットを使うルールを決めている」と答えたのが小学校では63%。しかし、当の子どもたちは53%しかそう言うておらず、開きがあります。これが中学・高校になると、親のほうは変わらず60パーセント前後が「親子間で決めている」と答えているにもかかわらず、そう認識している子どもはどんどん減っていく。

データは紹介しませんが、やはり小学校レベルでは、「チェーンメールをそのまま送るか」といったことを普段から親子で話すとか、そのあたりの共通理解が進んでいるほどトラブルが起きにくいと言えます。

次に使い方についてなんですが、ここにうちの院生が修士論文を書くために複数の高校で生徒、先生の両方に調査した貴重なデータがあります。ケータイメールの使用頻度をみると、生徒と先生とでは大きな開きがありますね。1日に10通以上送る先生は10%ぐらいしかいません。メールの内容もか

なり違って、「授業関係、仕事関係の情報交換」が先生だけなのは当たり前なんですが、「悩み事の相談」「おしゃべり」「なんとなく」は生徒が突出して多く、ずいぶん開きがある。皆さんもわかりかと思いますが、高校生は、日常的なコミュニケーションとして普段の会話のように使っているわけです。

1日に50通とか100通とか、何をそんなに使うんだと言われますが、互いに会話しあっているみたいな状況なんです。これを私は「ライフライン」と言っているんですけど、要は生命線としていつもつながっている電気、ガス、水道とかと同じようにケータイが使われている。このことを前提に話をしていくべきかと思うんです。

そもそもケータイは、女子高生の文化の中から生まれてきた。ここはやはり押さえておかないといけないですね。そのあたりで言うと、学校への持ち込み禁止、あるいは高校生の使用禁止、といった話が文部科学省とか大阪とか、さらにさかのぼると教育再生懇談会などから出ていますが、やはり内在的に出てきたメディアによる文化なので、禁止といったことだけでは解決しないのではないかと思います。

これまでの私たちの研究で導かれたのは、ケータイ・インターネットは、文字メッセージ、着メロ、そしてカメラという三大機能が集約されて生まれてきたという見解でした。

文字メッセージの歴史は、ポケベルにさかのぼることができます。最初は「トーンオンリー型」（1968年）といって、画面も何もなくてただ呼出音が鳴るだけだったのが、やがて「ディスプレイ型」という液晶画面のあるタイプが出現し（1987年）、数字の語呂合わせで返信するようになった。さらにそこへ数字→カナ変換機能がつき、カナ表示ができるようになると（1994年）、お互いが文字を打ち合うことで一方向のメディアであったポケベルが双方向メディアとなり、運用上の領域で変化が出てきたわけですね。このあたりからベル友、さらには出会い系などの話につながっていくわけですが、ともあれこうやって進化したポケベルのこの機能は、ケータイが受け持つことになっていきました。

着メロについては、「着メロボック」というのがあるので実際にみなさんにご覧いただきましょう。商売道具なので、あとでお返しくささいね（笑）。

最後はカメラです。そもそも、なぜカメラがついたのか。最初の一体型機はこれ、京セラの「ビジュアルホン」です。木暮さんはお持ちですか。

木暮：2台持ってます（笑）。

岡田：おお（笑）。あのカメラは内側を向いているんですね。要するにテレビ電話として使うことを想定していたんですが、これは売れませんでした。また、だいたいケータイは100グラムちょっとですが、これは160グラムぐらいあり、大きい・重たい・使いにくい。

カメラとケータイは相性が悪いだろうと思われていたわけですが、しかし2000年に「写メール」が登場します。これのすごいところは、従来のモデルと同じサイズにカメラをつけた、ということです。

では、どうしてカメラをつけたのか。初期モデルの画質は160×120ドットです。11万画素でしたっけ。そんなちやちやカメラをつけて何の意味があるんだ、という声もあったそうですが、源流はつまりこれ、プリクラです。プリクラとモバイルの相性がすごくよかったのかもしれない。ちょっと

見ていただきましょう。

(ビデオ再生)

ですから、たとえばケータイを取りあげたら解決するのかというと、おそらくそれを代替するものが出てくるでしょう。

また、出会い系もやっぱり青少年の有害メディアに指定されています。これは60年代にさかのぼると、時報ダイヤルでの混線遊びとか、わざと混線させたところにアクセスしてきた人を勧誘するとか、実際あったようです。

そして80年代半ば、テレクラが登場します。86年には伝言ダイヤルが始まりました。これもお見せしたいのですが、時間が押しているので飛ばします。そして90年にダイヤルQ2が登場し、そしていよいよ「ベル友」のブームが始まります。これも見ていただきましょう。

(ビデオ再生)

では、有害メディアの規制の流れについてお話ししたいと思います。関西大学社会学部の永井良和さんが『風俗営業取締り』という本を書かれています。風営法とはつまりは性風俗の「空間規制」ですね。たとえばいわゆる赤線や遊郭は、ある場所に集約することによって日常と区切りをつけると同時に、取り締まり・管理をしやすくするということでした。それが情報化の進展により、だんだんと空間を規制する意味を失っていくわけですね。そして「年齢規制」と「監視」へと変化していくわけです。強引なまとめですが。

たとえばフィルタリングやペアレンタルコントロールは、そういう流れだったのではないかと。こうした大きな流れとして見ると、「青少年“有害メディア”規制」やリスク規制は、もともとはそこから来ている。それが変化していくなかで、メディア規制に進んでいくわけです。監視というのも、たとえばインターネットでいじめや誹謗中傷が起こるのとかを見ていくわけで、1個1個のメッセージなんかをすべてチェックしていかざるを得ないわけです。そうすると、「保護」という名のもとに監視がどんどん進んでいく。

ただ、その一方で、ここにはリテラシーの問題もあります。「子どもが危ない」と言われていますが、実は大人も危ないんですね。たとえば架空請求詐欺の被害(2006年)を見ると、20代未満の青少年が危ないと言われているわけですが、この層の被害は全体の18パーセント。ところが30代・40代を足すと22%と、それを上回っています。実はおっさんがいちばん危ないのは明らかになっていきます(笑)。アダルトサイトとかからの請求なんですけど、どうもそういうことを直視しないで「子どもが危ない!」とことさらに強調される。

その中でメディア・リテラシーを育成していこうという動きもあり、「知識を高めよう」ということを言っているんですが、そこにはジレンマがある。たとえば「正しい使い方」を教えるということは、間違った使い方は禁止するということですね。はたしてそれがいいのか。ベル友にしてもポケベルの「正しい使い方」からは生まれなかったものですし、歴史を振り返っても新しい機能や使われ方、革新というのはイリーガルな使い方から生まれてきているわけです。

また、メディア文化ということで考えても、たとえばチェーンメールという問題があります。時間がないのではしよりますけど、たとえば少し前にベストセラーにもなった『世界がもし100人の村だ

ったら』という本があります。あれはもともとチェーンメールだったのをみんなが転送しまくって広まっていて、最後にああいう形になりました。あれがいいかどうかは別として、そういった文化が形成されたわけです。では、どのように考えていけばいいのか。このあたりはすごく悩ましいところなんですけど、とりあえずはリスクを下げるという意味では「適切な使い方を教える」ことも必要なんだけど、それだけでは十分でないということもやはり言う必要があると考えています。

時間を過ぎましたが、ありがとうございました（拍手）。

水越：15分で話をさせていただくこと自体が難しいところ、いい論点を出していただいたと思います。では次に木暮さん、お願いいたします。

木暮：木暮祐一と申します。モバイル評論家とご紹介いただきましたが、仰々しいしあまり評論的でもないで（笑）、評論家という肩書きはあまり使ってはいないんです。私はケータイを集めるのが大好きで、各端末から携帯電話の歴史をおさえていく、というようなことをやっています。私の話は岡田先生が詳しくお話してくださったこととほぼ同じなのですが、私は12年ほどマスコミのほうにいたものですから、ジャーナリスト的な視点からのぞいてみようかなと思っております。よろしく願いたします。

小・中学生の間で確かにいま問題が起きてはいます。問題点はだいたいご存じだと思いますが、たとえば「3分ルール」。メールの返事を3分以内に返さないと友達ではない、と。何が問題かということ、たとえばお風呂に入っている最中にメールが来てしまい、返事を返せなかった。だから友達と縁が切れてしまった、というんですね。だから各キャリアさんは、盛んに防水携帯をつくっている。冗談ではなくて、お風呂でメールが打てるケータイが必要、というニーズからつくっているんですね。それからケータイをやっている寝不足になりますが、なんで寝不足になるか、わかりますか。

水越：寝ながら打つから？

木暮：ええ、それに近いです。どうして寝ながら打つかというと、やっぱり3分ルールがあるからなんです。「おやすみ」というメールが友達から来てしまって、それに返事を書かなければいけない。また返事が来てしまったから、また返事を書かなければ、と夜の寝る前に20~30回メールを打たないといけないらしいんです。これで結局寝る時間がなくなって、昼間、学校に来て保健室で寝ているという生徒が多いといえます。中学校の先生からいろいろお話を聞くんですが、実際にこういう問題が起こっています。

そのほかにもサイトのトラブル、人間関係のもつれというのがありますね。子どもたちをとりまく人間関係というと、せいぜい学校、家族、あるいは町なか、というのが我々の世代では当たり前だったと思うんですが、いまではインターネットを通じていろいろな人とコミュニケーションが取れます。おそらくいまの子どもたちは、我々の世代が子ども時代に経験した人間関係の5倍、10倍ぐらいの人間と常につき合っていることになるのではないかな。だから精神的に疲れるということもある。

犯罪とか、モバイルゲーマーの問題とかがありましたが、子どもたちの問題だけではなくて、実は大人の問題でもあるだろうと思うんですね。「ケータイ禁止」論が出てきた背景を説明しておきたいと思います。子ども向けケータイは、だいたい2006年から出てきました。あとで述べますが、これは電話会社に振り回されているところもあります。ともあれケータイサイト、子ども向けのサイトが

問題になっているわけで、つまりは大人の問題ではないか。子どものためにつくったわけではないと思いますが、とは言いながら、実際、子どもたちの利用によるアクセス数、利用数、運用収益で賄っている会社がいっぱいあるわけですね。結局はそういった会社が問題を起こしてきたのかもしれない。会社も一生懸命やっていたらっしゃって、たとえばあるところは年間8億円だったかをかけてサイトのパトロールをしているんです。でも、その費用は結局、子どもたちのアクセス数で賄っているわけです。そのへんがどうなのかなと思いますね。

ちなみに、岡田先生がダイヤル Q2 とかの問題点を出してくださいましたが、いまケータイサイトを運営している大手企業の社長たちは、もとはダイヤル Q2 でビジネスをしていた人が多いですね。

世界と日本でケータイサービスを比べると、日本はかなり特殊です。よく「垂直統合」とも言われています。世界で売られている携帯電話は国際企業のノキアとかモトローラ、サムスンなどメーカーブランドが表に立っています。それに比べて日本のケータイは au やドコモ、ソフトバンクなど、電話会社のブランドで売られています。これは電話会社が端末の企画から販売まですべてを仕切っているからです。かつて日本でも、NEC やパナソニックなどのブランド名が入ったケータイが出ていたんですが、その商売が成り立たなくなり、市場に残ったのはドコモ、au、ソフトバンクの電話会社だけ。つまり、電話会社が絶対なんです。三菱電機さんが撤退されたことが大きな特徴です。

私はもともと、「このケータイは大変すばらしい、よくできています、使いやすいですよ」といった記事を書く仕事もしていました。そこから携帯電話のユーザビリティの研究を始め、ヒューマンインタフェース関連の研究などにも携わってきました。そういう視点から端末の形状をみていくと、1994年にこういう出来事があったんです。記憶にある方もいらっしゃると思いますが、93年以前のケータイは、発信ボタンと着信ボタンがいちばん下にありました。「NTT 配置」と言うんですが、これが94年に突然いちばん上の押しやすい場所に移りました。なぜかわかりますでしょうか。要するに、「どんどん通話しましょう」という時代の流れに変わったからです。

その前は、電話料金が高かったので「なるべく電話は使わないでください」という流れでした。「電話は無駄に使ってはいけない、3分以内に切れ、夜11時以降に電話するな」、というふうに言われてきましたよね。それがあるときから突然、NTTの民営化以降だと思いますが、どんどん電話を使いましょう、となった。トレンドドラマで「夜中の電話」も日常化させ、長距離電話もどんどん使わせ、果てには「帰るコールをしましょう」というCMで、ますます通話の機会を増やしていったんですね。これと同じことが携帯電話にも起こりました。94年からです。

その後の携帯電話の進化は、じつはぜんぶ携帯電話会社のサービスを使わせるためのデザインなんですね。だから日本のケータイは世界では売れないんです。まず形からしてちがいます。たとえばワンセグを見るためのデザイン、それからディスプレイが大きくてインターネットが見やすいデザイン、キーボードが大きくメールの入力がしやすいデザイン。つまり電話会社のサービスを使わせるためにデザインされているといっても過言ではないでしょう。

携帯電話の加入者数は94年から突然に増え、完全に利益追求主義になってきています。電話料金はどんどん下がり、でも電話会社としては料金が下がると利益が減りますので、iモードなどのデータ料収入の拡充に努めてきました。インターネットが使えるケータイがこれほど普及している国は日本だけです。ここにもやはり通信費を稼ぐためという背景があったわけです。

そして2006年に「キッズケータイ」が出たんですが、このころ加入者数は飽和状態にありました。すでに日本の人口の7割以上が携帯電話を使っていたので、ではケータイを持っていないお年寄

りと子どもたちに持たせよう、という戦略に出たわけです。つまり、ケータイが子どもに必要だったのか、というところから議論をする必要がありますね。電話会社に振り回されているのでは、というところがあるんです。

また、問題の背景には親の無責任というのがありますね。電車に乗っているとよく見かけますが、若いお母さんが一生懸命メールを打っていて、子どもたちは泣いていたり、騒いだりしている。親がケータイにはまっています。

問題を整理しますと、学校持ち込み禁止だけではまず解決できません。これは別の問題です。インターネットにしても、学校に持ち込みを禁止したところで家に帰ってやっていたら意味がないのと同じです。メールとインターネットが使えなければいいじゃないかとおっしゃる先生もいますが、大人になったらインターネットを使います。じゃあ学ばなくては、ということになります。

というわけで、ケータイは大人になったら必要不可欠です。そこで、いつから持ち始めたらいいかという議論があります。今日はソフトバンクの孫正義さんがプレゼンテーションした資料の抜粋をお持ちしました。これを見ると、日本の小・中学校で使われている教科書は合計すると7000ページにのぼるようで、しかしこのうち情報通信関連の記述は150ページ。わずか2%です。ちなみにケータイに関するデータはゼロでした。それから情報通信関連の授業時間は、6175時間のうち332時間を割いているそうなのですが、全体でいうとわずか6%です。当然、この中に携帯電話の話はほとんど入っていません。

ちなみに、携帯電話の歴史は実質20年ちょっとしかありません。特に機能化が始まったのは、1999年のiPod以降です。インターネットにつながるケータイが出たのが99年。2000年の11月にはカメラ付きケータイが発売され、それ以降はおサイフケータイだとか、いろいろな機能が乗ってきた。形を見たら何年何月に発売されたどこのケータイか、私は全部言えるんですけど（笑）、携帯電話はまさにこの10年間で急速に進化し、サービスが普及しました。こうした急激な携帯電話の進化に、使う側が十分に適応できていないということです。もう少し歴史の紹介をしたいところですが、時間もなくなりましたのでこれぐらいにしておきます。ありがとうございました。

水越：今日は岡田さん、木暮さんに日本的課題を浮き彫りにしてもらい、それをどう相対化するかということをお話したいと思っています。ではキムさん、よろしくお願いします。

キム：韓国からまいりましたキム・ヨニと申します。今日は、韓国から来ている者として違う視点を提示できれば、ということでお話しさせていただくことにしました。ケータイというものを隣の国ではどう使っているか、異なる文化を持つ人たちは日本のケータイ事情をどう見ているか、ということをお話したいと思います。どうぞよろしくお願いします。

まずはこの映画、「ブレードランナー」です。ご覧になった方もけっこういらっしゃるのではないかと思います。1982年に制作された作品で、背景はたしか2019年の近未来。これから10年後の未来を描いています。ハリソン・フォードが電話をかけるシーンがあるんですが、電話をかけるとテレビ電話のように映像が出ます。

私はこの映画を何回か見たんですが、最近また見直してちょっとびっくりしたのは、この映画がつくられたとき、2020年前後の電話がケータイに、つまり無線になることは想定されていなかったのか、ということでした。80年代とはいえ、すでに無線電話が出回り、自動車電話も使われていたかもしれませぬ。それでもこの映画は、未来の電話とはこのような映像電話だろう、と想像力で描かれた

ということになります。

さて、この大きなケータイは、本物の携帯電話だそうです。本物かどうかを決めるのは、通話ができるかどうか。この大きなケータイは、サムソンというケータイメーカーがアメリカに進出するためのプロモーションイベント用につくられたものです。いちばんケータイらしいものを、ということでシカゴのある広場で宣伝されたそうです。これでどう通話するか、ちょっと私には想像しにくいのですが。

ケータイとは、通話ができればみんなケータイと言ってしまいます。「線が切られた電話」というのが最も一般的に言われているケータイのありようでしょう。動く電話、移動体電話という言い方は岡田先生の本で私も興味深く読ませていただいたんですが、この「動く電話」という意味では、かなり「重たい」時代から実験されています。1979年に日本で自動車でスタートし、アメリカではさらに早い段階から行われていました。木暮さんのお話にもありましたとおり、1987年から携帯電話サービスが本格化します。

ケータイは、もちろん電話として続けていくこともできます。でも岡田先生のお話にもありましたが、本当にいまや電話ということでケータイを続けていくことができるかと言うと、そうではないかもしれません。女子高生のケータイに対する認識の話が出ましたが、やはりケータイといったときに、通話の機械というよりも、カメラとかデコ電、文字メッセージをやり取りする機械、という認識がかなり強いのだと思います。さらに最近はインターネットが使えるたり、MP3で音楽が聴けたりとさまざまな機能がついているので、「持ち歩けるパソコン」という位置づけで考えることもできると思います。

「通話」というと、コミュニケーションのためのツール、というイメージが強いと思うんですが、日本で地下鉄に乗ったときにびっくりしたことがあります。コミュニケーションをするためにケータイを使っているのか、それともコミュニケーションをしないために使っているのか、と非常におもしろく思ったんです。みんなケータイを取り出して何かこつこつ打ったり、見たりしているんですね。そういう人たちにはとても声をかけづらく、「声をかけないで」というメッセージをまわりに送っているなと感じたものです。

つまり、コミュニケーションのための道具でありながら、一方ではコミュニケーションをしないために使われているということです。後者は、日本のケータイの特徴の一つとして挙げられるかと思えます。メールという文字の媒体としてケータイを使うということは、かなり日本的な特徴として見えてきました。

皆さんのなかで、ケータイ小説を読まれた方はいらっしゃるでしょうか。ケータイ小説といったとき、たとえばドラマ化されるような純愛ストーリーとか、いろいろな特徴があると思いますが、やはりケータイで書かれ、ケータイで読まれるという現象は日本に特徴的なことであり、外国から来た人はびっくりします。

つまりこういうことなんです。私の母国である韓国では、もちろん携帯を用いて文字のメッセージを送ったり受けとったりはするんですが、どちらかというとチャットみたいな感じで、長い文章を書くという習慣はあまりありません。メール機能もついてはいますが、それを使っている人には正直1回も会ったことがありません。私も、韓国にいたときには一度も使ったことがなかったんです。いま日本ではじゃんじゃん使っていますが、そう考えると、日本のケータイの特徴、ケータイ文化というものが見えてきておもしろいと思います。

ケータイは下着のようなもの、と水越先生がおっしゃったことがあります。名言だと私は思ってい

るんですが、つまりは、ほかの人はケータイをどう使っているか、正確にはわからないということです。たとえば、私がとてもよく知っている人について、私は彼らが何をしているか、どんなテレビ番組が好きか、どんな習慣があるか、など全部知っているつもりなんですが、でもケータイをどう使っているかは全然知りません。水越先生にそういう話をしたら、ケータイは下着のようなものではないか、ということをおっしゃって、私はなるほどと思いました。本当のストーリーは隠され、不思議なものになっているのでは、と。たとえば、「あんたはいまどんな下着を着ているの」と言ったら、「白っぽい」とか、その程度の答えで話を終わりにする、みたいな感じです。自分は相当ケータイを使っているけどそのことに気づいていないとか、自分は一般的な使い方をしていていると思っているけれど実はそうではないとか、そういうかなり不思議なものとなっているのではないかと思うんです。

デコ電といって、デコっているケータイがあります。身体的な意味で言うと、ケータイがテレビやラジオなどほかのメディアとは違う意味を持ち始めてきていることを、デコ電は体現しているのではないかと思います。

さて、各国でケータイ調査が行われていると思いますが、韓国ではケータイを文字の媒体として使うことはありません。SMSで単文メッセージを送ったりはしますが、メールで長い文章を送る人には会ったことがないし、私もやったことがありません。でもその代わりに、最近はカメラやムービー機能を使う人が増えているようです。私は日本に来て4年になりますが、日本に来る前に使っていたケータイにはカメラ機能がついていませんでした。当時もカメラを使っていた人はもちろんいましたが、私は使っていなかったんです。でも最近、韓国に帰って友達とか家族に会うと、ものすごくカメラを使っています。カメラだけでなくムービー機能も使い、ケータイでいろいろな動画や画像をつくってブログや動画サイトにアップする、ということがかなりはやっているらしいです。

たとえばこの写真ですが、これは韓国ではかなりよく見かけるシチュエーションだと思います。地下鉄の中で、いちばん左の女性はケータイでしゃべっています。日本ではあり得ません。話しているし、また地下鉄の中で自分の写真を撮っている。「セルカ」と韓国語で言って、セルフカメラの略です。こういうふう若い女性は、「今日のヘアは不満だったね」みたいな話になるとケータイですぐ自分のセルカを撮り、それをブログにアップする、といったことを日常的な感覚でやっているようです。お互いに写真を撮り合ったり送り合ったり、というのは日本にもよくありますが、韓国ではこのようなことが流行の文化として、女性にかぎらず若い人たちの間でかなり活発に行われているそうです。

話が飛びますが、2008年、韓国は大騒ぎでした。報道でご覧になった方もあったかと思いますが、自分の国とはいえ本当に疲れる大変な国です、デモが好きで（笑）。ソウルはいつもデモ中という感じなんですが、80、90年代のデモはちょっと怖い感じのものが多かったですね。最近のデモはかなりお祭り騒ぎで、ちょっとのぞいてみたらおもしろいかもしれないです。デモ隊がパレードをやっているときに、脇で屋台が出ていたり、みんな子連れできていて、じゃあ一緒にパレードをしましょう、みたいなことになったり。

そのなかで、ある言葉がはやり始めました。「ストリートジャーナリズム」です。韓国生まれの言葉ではないと思いますが、ソウルがデモが大騒動になったとき、テレビ局や新聞記者ではなくて、市民がみんな自分のケータイで撮影しだしたんです。こういうことが「ストリートジャーナリズム」という言葉で紹介され、メディア界にも浸透しました。しかし、デモを好ましく思っていなかった李明博政権は、警察に対して、ケータイをとりだしたデモ隊に対しては厳しく接するようとか、ケータイをとりだしたらあまり暴力を振るわないようとか言ったようです。韓国は韓国で、日本とはちよ

っと違う方向性を持って、いろいろなケータイの使い方、またいろいろな問題が出ていると言われて  
います。

さて、これは私の姉の娘の写真です。上の子はイエニ、小さいほうはユンソといいます。3年ぐら  
い前のことですが、この子たちが1度「禁止された遊び」をしたことがあるんです。それを紹介して  
今日の発表を終わりにしようかと思えます。

私もとてもかわいがっているこの子どもたちは、ママのケータイが大好きです。でも、電話をかけ  
るではありません。かける相手もいませんし。このときは下の子が幼稚園、上の子が小学校1年ぐ  
らだったと思うんですが、ある日、二人はママのケータイで動画を撮りました。自分たちの姿を動  
画で撮り合って、つまりはメディア表現をしたんです。どんな表現だったかという、お風呂上がり  
に部屋を裸で走り回っている姿をケータイ動画で撮影しました（笑）。

そう聞くとかわいいと思われるかもしれませんが、実際に見たら、それはものすごく大変な画像で  
す。小さいスクリーンの中で二人の女の子が、というのは髪型からわかるんですが、裸で走り回り、  
お尻がクローズアップされたりするんです。ちょっとこれは……という感じでした。私からすれば、  
それはすごくかわいいんです。しかし、じゃあもしこの動画がネットに流されたらどうなるの、と思  
うとすごく怖くなりました。二人にはとてもおもしろい遊びだったようですが、私と姉はびっくりし  
て、すぐに削除しました。

この子たちにとってケータイは、私が思っているものとはまったく違うのだろうと感じます。いま  
上の子は、小学校4年生になったからとプレゼントでもらった自分のケータイを持っています。しか  
し、電話をしても出ません。この子には、電話をする、電話に出るという感覚はあまりないのもし  
れません。その代わりに、ケータイで音楽をものすごく聴いています。下の子も、「私もMP3プレー  
ヤーがほしい」と言い始めました。この子たちにとってケータイはどのようなものか、私は本当に想像  
できません。

最初に映画『ブレードランナー』を紹介しましたが、いま想像されているケータイの未来は、「着  
信アリ」みたいに怖いおばけがコンタクトしてくるような道具だったりします。しかし、ユーザーに  
とって実際のケータイというものは全然そんなものではありません。私も、想像もつかないような新  
しいものとしてケータイとつき合っていきたいと思っています。私のお話が少しでもネタになればい  
いのですが、ありがとうございました。

水越：ありがとうございました。

一つ申しあげておきますと、僕は、ケータイを活用した犯罪が起こっていたり、ケータイがある  
ことによって子どもたちがしんどい思いをし、場合によれば大変な問題が起こっている、といった事  
実を見過ごし、そういうのはなかったことにしてやっていく、と言っているわけではありません。そう  
いう事実があることは確かです。

今日はさまざまな立場の方々がいらしていると思うんですが、乱暴な言い方をすれば、教育学系で  
はケータイはネガティブなものとして取りあげ、一方、社会学系のほうではもう少し鷹揚に、社会で  
起こっていることの観察であるという視点から取りあげる、といった傾向があると僕は感じています。  
言うまでもなく、どっちが悪いわけでもないわけでもありませんし、どちらも大事な観点です。問題  
は、ケータイの実態ではなく、ケータイとはこういうものだよ、というイメージが様々なかたちで出  
てきており、そうしたイメージや言説をめぐる妙な議論が横行していることではないかと思うのです。

そうして、教育学の人が、あるいは社会学の人が言うところの言説やイメージというものに巻き込

まれていって、実態がよく見えないところで議論をしていくということが起こりました。自戒の念を込めてですが、非常に腹立たしい状況だったと思います。ケータイというのはどのように歴史的な展開をしてきたのか、あるいはケータイは線のない電話や小型カメラとどう違うのかなど、時間軸や空間軸で見直しながら実態はどうなのかということを考え、それに対してどういう批判や実践ができるのか、それに対してどう取り組んでいくか。

言説に踊らされるのはやめようということです。今日はどちらかということ「禁止すること」自体についての問題をあぶり出そうとしているわけですが、持っていること自体が危ないとか、そういうことが言いたいわけではないということをご理解ください。

(中略：会場との質疑応答)

水越：では、まだ論点はあるかと思いますが、もう一度登壇者の方々に一言ずつコメントをいただいてディスカッションを終わります。

キム：私はやはり日本人とは違う感覚なので、「子どもたちがケータイを持ち歩くのはだめです」という提言をまとめたらおもしろいかも、と思いました(笑)。韓国にもいろいろな問題がありますが、日本とはちょっと違っているように思います。ケータイを持ち歩くのが危ないとか、それが有害だというよりは、安全確認のために子どもたちにできるだけ持たせようとする風潮があるようです。さきほど見ていただいた小さい下の子も、最近は外で遊ぶようになったからそろそろケータイを持たせたほうがいいのか、という話になるんです。

ケータイがいいものか悪いものかということに対するいろいろな議論や考え方は、社会的、文化的な影響がかなりあるのではないかと思います。

木暮：いろいろなことを言わせていただきましたが、突き詰めると親の問題がけっこう大きいのではないかと思います。学校関係者、特に小学校、中学校の先生に言わせると、そもそも未成年の小中学生は携帯電話を購入できませんので、基本的には親が同意して契約しているわけです。言ってみれば親が買い与えたわけなのですが、その一方で、ケータイでトラブルになったら、「学校は何をやっているんだ」と文句を言いに来るのも親です。これでは学校関係者も困ってしまって、「だったらいっそのことケータイを持ってくるな」という話になるのもしょうがないと思います。子どもだけでなく、親子の携帯電話の使い方について、きちんと考えないといけないのではないかと思いますね。

岡田：親、学校、子どもという関係で言うと、確かに親に任せているわけなんです。でも親だけでは解決できない。そうすると親と子どもは学校しか頼るところがなくて、だったらとりあえず逃げ場として何かをつくってあげなければいけない。学校も大変ですよ。先生だけでは負いきれないんですが、そこで頑張っている先生方もいらっしゃいます。

教育という側面が加わると、遊びの空間がどんどんなくなっていっている気がします。指導教育、リテラシーの育成というとき、やはり先ほど言ったように、そこでイリーガルな使い方とか、逸脱しながらとかいうやり方が必要だし、その中から何かちょっとした新しいルールが生まれてくるのかもしれない。そういうものがもっとあっていいはずなんです。それを用意してあげるのが学校とかのおもしろさであったり、教育の楽しさであったりするはず。昨日一緒に登壇した先生方も、そうい

うところをいかに学校でつくるかということにも心を砕いていました。そのあたり、いろいろ知恵を絞っていくことも必要なかと思っています。

水越：ありがとうございました。最後に、僕のほうから少しまとめてお話ししたいと思います。

僕は2004年ごろからケータイの研究を始め、ケータイのメディア・リテラシーはどのようなものかと考えてきました。テレビのメディア・リテラシーがあり、新聞のメディア・リテラシーがあり、ケータイのメディア・リテラシーがあり、コンピュータのメディア・リテラシーがあるのだろうか。メディアごとにそれぞれのメディア・リテラシーがあるとすると、メディア・リテラシーとは何なのか。

大ざっぱに言うと、これまでのメディア・リテラシーはマスメディアのリテラシーでした。マスメディアが提供してくれる記事や番組を批判的に読み解いていくことで展開しました。僕はいまでもこれは非常に重要だと思っています。

ただ、ケータイに送られてくるものを批判的に読み解くだけで、はたしてケータイリテラシーと言えるかという、それはおかしいです。ケータイリテラシーとは、メールがちゃんと書けることなのか、あるいは写真がちゃんと撮れることなのか、エチケットを守ることなのか。それも全部大事だけれど、やっぱりどこかで僕たちは、ケータイの社会的なイメージを批判的にとらえなおしたり、場合によっては市民参加型でそのあり方をデザインしなおすような、そんな総合的なリテラシーとして想定する必要があるのではないのでしょうか。

僕はマスメディアのリテラシーをめぐって、送り手と受け手が協働していくことが重要だといってきました。昨今、送り手と受け手という対立図式に則った議論は無効だと言われますが、僕はそうは思っていません。ケータイでいうとキャリアやメーカーで、送り手と受け手とはいえませんが、どういう仕組みがあってケータイができているのかを知り、システムと利用者、メディアの政治経済性と社会文化性、といったもののせめぎ合いをとらえる目線を手に入れることは、やっぱり非常に重要なリテラシーだと思っています。

ケータイを利用した犯罪に巻き込まれる、といったこと避ける術について議論することも重要でしょう。しかし、先ほどから学校現場の先生方が非常にクリエイティブな意見を言ってくださり、禁止するだけではなく、授業の中でも活用できる可能性があるかと教えていただきました。まさに、僕たちはそういうものを考えていく必要があるのではないのでしょうか。

ケータイには、もっとポテンシャルがある。メーカーやキャリアの技術者などの中にも、日々いろいろな可能性を追求し、志をもって日本のケータイ文化に向き合っていこうとされている人はいます。ただ、いろいろな意味で縛られている。縛られたケータイのキャリアやメーカーと、縛られた利用者がいて、何か問題が起こったら、たとえば子どもたちを隔離するようにして守る、といった対処をしているだけでは、問題は根本的に解決しません。

ケータイを活用したコミュニケーション全体の仕組みを含み込んだメディア・リテラシーを、関係者みんなが身につけていくこと。それが先ほど岡田さんがおっしゃった、いろいろな立場の人が協力し合いながら対策をしていく必要があるということではないかと思っています。そのときに、国際比較、歴史的な展開に目を向けることは非常に重要でしょう。

今日この会場では、「ケータイ・トレール」というイベントが行われています。ケータイに外部マイクを接続して、会場のみなさんをモバイル・ムービーで録画・録音しています。しかし、録音マイクをケータイ本体に接続するという機能は、どこのキャリアも公式にはスペックとしていませんでした。もちろん、イヤホンはつきます。聴くための機器、つまりコンテンツを消費するための

機器は接続できるんです。だけど、僕らが表現するための機器、つまり何かを録音するためのマイクは、公式的には使えないことになっている。結局僕たちは、キャリアは技術仕様として公式的に指定していないにもかかわらず、おそらくはメーカーの技術者がよい意味でのハッカー精神で組み込んでおいたマイク機能を見つけ、そのおかげで「ケータイ・トレール」を行っているわけです。高画質、高機能なムービー機能を備えたケータイが出回り、それらはモバイル・テレビとして僕らを視聴者にはしてくれるけれど、アクティブな表現者にはしてくれない。これが今のケータイ技術の象徴的な状況だと思います。技術屋の志と、モバイル文化のリアリティ、ユーザーのニーズがつながっていないんです。

こういうことも含めて、ケータイを、たとえば表現やアートのために使うなど、さまざまな可能性をもつメディアとしてとらえていく。その一方で、いま起きている事件や問題をどうしていくかということを考えていく。立体的な視点でケータイを論じ、かかわっていくことが、おそらく呪縛としての「禁止された遊び」という言説やイメージから僕らが脱却していくために非常に重要ではないかと思えます。

最後にあえて先ほどの質問にお答えします。「禁止された遊び」という実態は実はないんです。そのイメージ、あるいは言説だけが広まっている。そういう時代にそれを相対化し、批判していくということが非常に重要なのではないかと考えています。

2時間にわたってご清聴ありがとうございました。登壇者の方、今日はありがとうございました。

(以上)